



Intraoperative rapid diagnosis of pleural lavage cytology in non-small cell lung cancer

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2025-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 潔道 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/0002000409

論文審査の結果の要旨

胸腔内洗浄細胞診（PLC）陽性は非小細胞肺癌における予後不良因子であるが、これらは術後に PLC を評価した研究であり、術中に PLC を評価し、治療方針や術式への影響を検討した研究はこれまでになかった。本研究の目的は、術中迅速 PLC 診断（rPLC）の結果が臨床因子や予後と関連するかどうか、さらに術式や治療方針の変更の必要性和関連するかどうかを明らかにすることである。

2002 年から 2014 年までに静岡県立静岡がんセンターで非小細胞肺癌の手術時に rPLC 評価をした 1838 症例を対象とした。rPLC 検体は手術開始時の審査胸腔鏡後に採取し、陽性、擬陽性、陰性を判断した。そして、rPLC の結果と、臨床病理学的因子、予後を後方視的に検討した。本研究は、静岡県立静岡がんセンター臨床研究倫理委員会の承認を受け実施した(承認番号: J2021-39-2021-1-3)。

rPLC は全体で 96 例（5.3%）、根治切除を受けた 1258 例のうち 46 例（3.6%）で陽性と判定された。rPLC 陽性に関連する臨床因子を多変量解析で検討した結果、がん胎児性抗原の高値および腺がんが有意な関連を示した。根治切除例における 5 年全生存率は、rPLC 陽性群が陰性群に比べて有意に予後不良であった（ $p < 0.001$ ）。しかし、根治切除後に胸膜播種や悪性胸水が認められた症例群よりは有意に良好な予後を示した（ $p < 0.001$ ）。さらに、rPLC 陽性例において、pN2 群と pN0-1 群の間で 5 年生存率には有意差が認められなかった。このことから、rPLC 陽性かつ pN2 であっても根治切除を行う意義があると考えられた。また、rPLC 陽性群では陰性群に比べ、リンパ節病期のアップステージングが有意に多く認められた（ $p < 0.001$ ）。したがって、正確な病期決定の観点からも、rPLC 陽性症例ではリンパ節の系統的郭清を行うべきと考えられる。最後に、rPLC 陽性症例の 9%で胸腔内の再評価により胸膜播種が確認されたことから、rPLC 検索は見落とし防止に有効であることが示唆された。

審査委員会では、非小細胞肺癌の手術時の rPLC 評価の有用性を初めて提唱した点を高く評価した。以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 新村 和也

副査 乾 直輝

副査 馬場 聡